

文と絵
松永伍一

にっぽん 母物語



冬樹社

にっぽん母物語 定価 1200 円

昭和53年10月20日 初版第一刷発行

著 者 松永伍一

発行者 高橋直良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町 3-27-6

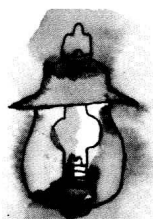
郵便番号 101 振替 東京 8-7757

印 刷 図書印刷株式会社

© Goichi Matsunaga 1978 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

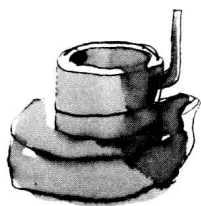
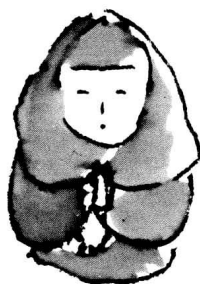
0095-10287-5190



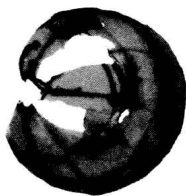
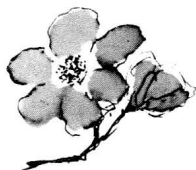
ぽん
母物語



松
永
伍
一



冬
樹
社



にっ
ぽん
母
物
語

人形たちの婚礼……………7

悲しみの歌箒……………21

地底の乳房……………35

富山の女二揆……………49

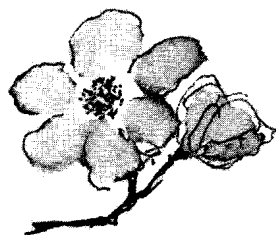
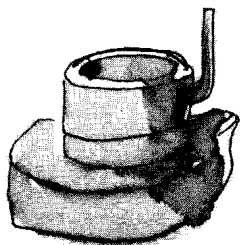
寂光院の国母……………63

母に添寝の……………77

岸壁の母……………91

玄海灘の潮風……………105

目



きりしたんマルタ……………119

子を凍土に埋めて……………133

野ロシカの手紙……………147

飛鳥の女帝……………161

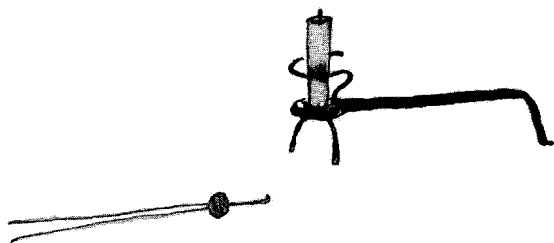
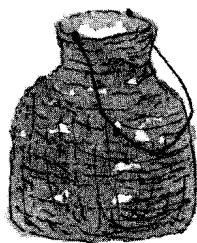
女座長の泣き笑い……………175

若狭の手押し車……………189

実朝の母・政子……………203

流転のメロディ……………217

次



装幀 小松桂士朗

人形たちの婚礼

津軽にある真言宗のK寺に、人形安置堂があります。本堂の裏手にあるその部屋に入ると、数えきれない人形や写真や、死者たちの使っていた道具などが目に映りますが、それらが整然と飾られているだけに、生きている者たちから遠くに隔てられた死者の悲しさがいつそうはつきり感じとれるのでした。

男と女の、一對の人形がガラス・ケースの中に納められています。それらはいくつも並んでいます。戦争中のもありますが、多くはあたらしい人形です。デパートの人形売り場をおもわせます。その色鮮やかなケースの中の男と女にはそれぞれ名前がつけられています。「苦米地達夫」「妻さち子」といった具合です。年齢を記入したものもあります。

私がお坊さんに「これは、ついこのあいだの日付ですね」とたずね、まあたらしい人形を眺めていますと、「そうです、これは可哀そうでした」という答えが返ってきました。世の中にこんなこともあるのか、と私は驚き、背すじに冷たい水が流れ落ちるようなおもいで、そこに立ちつくしていました。話はこうです。青森県のM市の近くを乗用車に乗った若い二人が走っていました。あす結婚する二人です。どうせ一夜明ければ顔を合わせられるのに、幸福を手に入ればじめて若い魂は欲ばりですから、とりたてて打ち合わせなどないのに、そういう口実で

デイトをして、想いを熱くしていたのです。運転席にいる武士さんは、サヤカさんに肩を抱かれるようにして、あすの式場で読む「誓いのことば」のさわりの部分でも稽古していたのでしょうか。前から走ってきた大型ダンブカーと衝突したのです。信じられぬことが、ときどき世の中には起こります。

「おめがヨ、武士さんと新婚旅行サ出がげる夢みたどもハ」

サヤカさんの母親アキさんが、そう言ったのは、二人が車に乗り込むときですから、まだものの十分もたっていないません。そこへ、二人の死が伝えられたのでした。アキさんは狂ったように泣きました。

予定された結婚式の日は、それぞれが火葬された日でした。

しかし、アキさんの懇願によって、二人の葬式を「死者たちの結婚式」に切り替えることになり、武士さんの両親もそれに賛成してくれました。

サヤカさんは父親を早く亡くして、母の手で育てられました。武士さんは、婿養子としてサヤカさんの方に住むことになっていたのです。そんなわけで、武士さんの遺骨は白布に包まれて、式場であるサヤカさんの生家へ運ばれ、二つが無言のまま並べられました。「ようこそ、おいでくださいました」。アキさんは、そう言って迎え入れたのです。親類・縁者たちも、もらい泣きをしました。

仲人が「結婚式をはじめます」と宣言しました。三三九度の酒盃も代理の人によって行われました。謡曲「高砂」もありました。

「武士は、お見かけの通り、ふつつかな者ですが、どうぞこれからもよろしく」と、父親が、涙をこらえて挨拶をしますと、

「サヤカも、武士さんのような立派な方にめぐり合えて、どんなに幸せにおもっているかわかりません。末永く力になってやってください」と、アキさんは標準語で受けました。

それから、お祝いの酒盛りになりますが、みなすすり泣くばかりで、白布の遺骨に向かって「おめでとう」と言いかけても、結局は「こんなことになってしまって」と愚痴をこぼしてしまうのです。

アキさんは、その中であって一人勝気なところを見せていました。「男のいねエ家はナス、さんびしいものがス。武士さんサ、家の人になってくれたデハ、おらあ、力づくよくテ」と、減多に酒など飲んだこともないのに、唇に笑いすら浮かべて、酒盃を干していました。

そのあと、坊さんと呼んで葬式をしたのはもちろんです。

アキさんは、ある日町に出て、男と女の人形を買いました。正確に言えば、花

嫁と花婿の衣裳をつけた人形です。それに、「武士」「サヤカ」と名札を立て、年齢も「二十六歳」と「二十四歳」と記入し、「昭和五十年十月十五日結婚」と、別紙に書いて、ケースの一面に貼りつけたのでした。初命日の午後、アキさんはそれをK寺に奉納しに来たのですが、そのことを知って、武士さんの母親も友だちもいっしょについて来ました。

K寺では、それを受けつけ、お経をあげてくれました。

「武士さん、立派な花婿さんだなス」

アキさんがまず、感きわまって言いました。

「サヤカさん、みごとな衣裳サ着けて、おらハ、見とれてすまで、な。美し花嫁さんだなス」

武士さんの母親もそう言って、人形を見つめ、タオルを出して目がしらを拭くのでした。

友だちも酒を飲みました。

「ここで、またお祝いすべエ」と、アキさんは、つくってきた煮物などを重箱から出し、五、六人で円座になって、また祝い酒をくみ交わしました。

現実には結婚できなかった自分の子供たちを、あの世で結ばせてやりたいという

母ごころが、そこにあります。母は、幻を見ることができのです。幻がはっきり浮かんでくると、それが真実になるのですから、事実よりもっと強く、はげしく気持をゆさぶることになるのでしょう。「幻視のよろこび」とでも言ったらいいかもしれません。アキさんは、あす結婚するという二人の夢までみていました。車で出て行く幸せな若者たちの息づかいを感じとってもしました。だから、他の人形たちのように、架空の花嫁や花婿をあてがっている母親より自分はまだ幸せなのだとおもうこともできました。

八歳で水死した息子をもった母親が、十五年目に、その子の結婚相手を勝手に決め、「大竹秀文・二十三歳」「妻京子・二十歳」と記して人形を奉納している例などを、アキさんは知っていたからです。

お坊さんも、いくつかの事例を話してくれました。しかし、アキさんは、自分の娘とその夫との死後の幸福をねがうとき、ふと自分が結婚したときの初夜のことをおもい浮かべて、女として受けついでいかねばならぬもの——その一筋の赤い帯のような血の流れを考えたのでした。

私は、アキさんの初夜をうかがい知ることにはできませんが、弘前の高木恭造氏の「生活^{シヅメ}」という詩（それには「結婚^{ツムクシ}の晩^{バン}」と副題がついています）を重ねてみ



たくなりました。

あれカシエ風カシエア吹いで

ドロの樹キアジャワめでるんだネ

泣ナグな

泣ナグな

花嫁ハヌマア泣ナグ奴ヌあるガ

銭ゼンコねはで泣ナグのガ

なんだて こした貧シムウマンボくせい結婚シムウマンサねばまいねのガ

(みんな飯事オウルノコだと思れ)

瘦スへだ体タコくつけでも

なんも温ヌぐぐねジャ

ああ 俺達オラダ二人ニヒトア

日シあたりぬすむ蠅オシナコど同ドウしだ

明日アスからお前マエも紫ムラサキの袴ヘガテコはいで黒クロいまんとコかぶて役所ヤクショサ行ユクグのが貧

ボ臭クサい婿ムコど花嫁ハヌマだ

泣ナグな

泣グな

なんも恐グね

あれア風^{カジュ}ア吹いで

ドロの樹アジャワめでるんだネ

北国のくらしの実態が、この詩の背後に横たわっています。貧しさが、美しさになっていく一瞬が、ここにうたいあげられていると言ってもさしつかえありません。アキさんは、初夜に、夫と全裸で抱き合った、北国の風習のかなしさを思い出したのかもしれませんが。しかし、一人娘のサヤカさんは、武士さんとからだを通じて愛し合っていたとしても、儀式をくぐりぬけたあとの初夜を体験することはできなかったのです。その、だれでも女が通過していく「一生に一度の門」を、母親としてちゃんとくぐらせてやりたかったにちがいないのです。

ケースの中の花嫁と花婿は、微笑していました。一瞬の幸福を永遠の幸福にしてしまったようなその表情を、アキさんは眺め直し、来年また逢いにやって来たら、やっぱり同じ笑いを注いでくれるだろうか、とおもうのでした。人形は他人が作ってくれたものですが、いったん名札をつけられると、その人になりきってしまうのですから、ときどき逢って死者のこころを見届けるしかない、自分に言